

阪谷朗廬の学問とその新思想の転化

国際日本文化研究センター 外国人研究員
台湾大学教授 徐 興 慶

要 旨

阪谷朗廬（素、1822-1881）は岡山（備中）川上郡九名村（現在岡山県小田郡美星町）の出身で、幕末の漢学者、儒学者、教育者として、また明治維新期の官吏として知られている。彼は七歳から陽明学者大塩平八郎（1793-1837）の漢学塾「洗心洞」に入り、ついで江戸で同郷の朱子学者昌谷碩（精溪、1792-1858）に入門、十七歳になって儒学者の古賀侗庵（1788-1847）師事し、のち広島藩の藩儒にも迎えられた。

1853年、ペリー艦隊の「黒船」が来航した際、朗廬は岡山にて「興讓館」（興讓館高等学校前身）を創設し、漢学を普及しながら、洋学を兼修していた。幕末動乱期に、彼は開国論を主張し、議会主義、海軍充実を説く開明派であり、世界の共通言語が必要であることを唱えた。1862年に彼は長崎へ赴き、中国の知識人林雲逵（1828-1911）¹⁾と筆談を行い、『林阪筆語』を残した。また、渋沢栄一（1840-1931）は朗廬に師事し、二人の間においては、詩文を交わすほか、姻戚関係まで結ばれた²⁾。

朗廬は1866年6月（四十五歳）に第十五代將軍徳川慶喜（1837-1913）に謁見し、のち「二条城」にて経書を講じた。1881年1月に福沢諭吉（1835-1901）が設立した「交詢社」の「常議員」として選ばれ、「明六社」の一員となった。さらに陸軍省に務めた後、文部、司法などの要職を歴任したほか、「斯文会」の文学教授になり、東京学士会議員に選ばれた。

日本に近代化において、朗廬は朱子学の学問から、日本天皇へ忠誠心そのものを育んだ。本報告の主旨は以下の焦点を当てる。(1)朗廬が受けた儒学教育及び彼が持つ儒学思想の特質とは、

1) 林雲逵（1828-1911）は広東の人、清末に東アジア海域において、活躍した書法商人であった。1863年（文久3年）から1883年（明治16年）に至るまで「司理廣東會所主管」として、十年間に亘って長崎に居留した。その間、日本の学者や文人墨客との文化交流を頻繁に営んだ。

2) 朗廬の息子・芳郎の妻は渋沢の娘にあたる。

どのような関係があったのか、その伝統のある学問は明治社会にどんな影響をもたらしたのか。(2)朗廬と林雲逵の筆談は、どんな内容であったのか。(3)「白鹿洞揭示説」から見た朗廬の儒学観、西洋観を分析し、彼の「尊王攘夷説」や「開港論」の形成背景を検討する。

一、阪谷朗廬と儒学教育

- (1) 大塩平八郎の塾「洗心洞」、同郷の儒官昌谷精谿、昌平黌教授の古賀侗庵の塾「久敬社」における修学及びその学問の形成
- (2) 郷校「興醸館」における儒学教育
- (3) 阪谷朗廬の著作と詩作について

二、阪谷朗廬と林雲逵の筆談

文久2年(1862年)12月に41歳になった阪谷朗廬は長崎へ来航した書法商人の林雲逵と筆談し、『林阪筆語』を残した(国立国会図書館蔵)。筆談は問答の形で行い、当時の日中通商をめぐる法規や魏源、林則徐、駱秉章などの中国知識人について、さらに清朝中国の学問、洋学、「夷人」に対する扱い方、キリスト教ないし軍機の問題など、多岐にわたって意見を交わした。その内容について分析する。

三、「白鹿洞揭示説」から見た朗廬の儒学観、洋学観

「白鹿洞揭示」は朱子が廬山山麓の白鹿洞に書院を再建した時、父子、君臣、夫婦、長幼、朋友の儒教における五つの基本的な人間関係を規律する徳目を掲げた。朗廬はこの規律を親、義、別、序、信の五教と名付け、学問修行の目標として、「表的千秋鹿洞の辞、晨昏拝誦シテ好ク思ヒヲ留メヨ、士農工賈各人ノ業、只各人君父ノ為ニ為セ」と、あらゆる政治も経済も学問も、人間が為すべき倫理そのものを優先的に考慮、実現しなければならないと考えている。ここでは、文明開化期における日本の伝統と啓蒙の問題を、朗廬の基本的なモチーフとを対照して、彼の融合主義の思想形成や攘夷主義者と幕府による開港の対策を批判する内容を検討する。